

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 17 2005年11月



〈上〉長崎空港にて：プロジェクトに参加したイスラエル・パレスチナ・日本の高校生とスタッフ
涙と笑顔で再会をかたく誓ってお別れ

支援者の皆様、もうすぐクリスマス、世界の平和のために祈る特別の機会です。しかし「平和の君」であるキリストがお生まれになった聖地は今なお紛争解決のめどがたっていません。かたい友情に結ばれて帰っていった子どもたちは、憎悪と復讐、不安と抑圧の地であって、これからどんな「平和の種」を蒔いてくれるでしょうか？ 希望と光を求めている子どもたちを、今後とも温かく見守って下さいますようお願い申し上げます。今号にはフェレット師、イブラヒム師とベツレヘムの子どもたちからの皆様へのメッセージを掲載いたしました。

井上 弘子 スタッフ一同

NPO 法人 聖地のこどもを支える会

事務局：☎ 164-0013 東京都中野区弥生町 1-19-1-201
Tel & Fax : 03-3379-5571 e.mail : seichi@k.email.ne.jp
ホームページ : <http://www.ne.jp/asahi/seichi-no-kodomo/org>
郵便振替 : 00180-4-88173



イスラム教徒にもキリスト教徒にも 喜びは喜び

親愛なる皆様

このメッセージがお手もとに届くのは、キリスト教徒がクリスマス準備を始めるころでしょう。イスラム教の祭りも先週終わりました。

この祭りの間、公立でも私立でも、宗教を問わず、学校はすべてお休みでした。30日間の断食をするラマダンの終わりを告げる「Id al-Fitr」の祭りだったからです。大人も子どもも、イスラム教徒はみんな夜明けから日暮れに至るまで、飲むことも食べることもたばこを吸うこともしません。アラーの神への深い信仰と従順の心で、しっかりと断食を守ります。

「Id al-Fitr」の祭りの3日間、みんな大喜び、おいしいものをいっぱい食べ、親戚同士訪ね合い、爆竹が鳴り、花火が夜空を彩ります。ラマダンには本当に喜びの月なのです。この時ばかりはたくさんの人が、1日だけでも、あの「恥辱の壁」を通り抜けて自由に通行する許可をイスラエル軍から得ることができます。着飾った子どもたちは、プレゼントされた新しいおもちゃを得意げに見せ合って、楽しく遊びます。

ところがジェニンの9歳の男の子には、このおもちゃが命取りになりました。プラスチックのピストルで遊んでいた時、運悪くパトロールにきたイスラエル兵に自動小銃で殺されてしまったのです。たった9歳の男の子が持っていたのは、ただのプラスチックのおもちゃだったのに、兵士は自分が本物のピストルで脅かされていると思い、恐ろしくなったのでしょう。

しかしその後信じられないことが起こりました。子どもの両親が深い悲嘆に暮れながらも、和解と赦しはいつでも可能だという証をしたのです。彼らは殺された我が子の臓器をイスラエル人の患者のために提供しました。それはラマダンの奇跡でした。息子の「生きる喜び」を奪われた両親が、他の人に、しかも「敵」に「生きる喜び」を与えることを望んだのでした。

今は学校の授業も再開されました。親たちがみんな「我が子には一番良い教育を受けさせたい」と望んでいるのには感心します。とりわけキリスト教の学校は、教育内容がしっかりしているので、イスラム教徒からもキリスト教徒からも高い評価を得ています。授業料は比較的高いのですが、皆様が寛大にお送りくださる支援金のおかげで、貧しい子どもたちが、質のよい初等教育、中等教育を受けることができますのです。

まもなく待降節、キリスト教徒はこれから救い主を迎える準備を始めます。今年は幸いなことに、ベツレヘムのクリスマスはとてにぎわうことが期待されています。

最近世界中から大勢の巡礼者が戻って来ています。おかげでたくさんのホテルが営業を再開し、おみやげ職人たちも働き始めました。私は皆様の中にはクリスマスをベツレヘムで祝うためにグループで聖地巡礼においでになる方があると聞きました。その方たちがきっと皆様と、聖地での体験、そしてベツレヘムの子どもたちと出会った喜びを語ってくださいましょう。

皆様にクリスマスの喜びと祝福が豊かにありますように。感謝のうちに。

連帯事務局長 ピエトロ・フェレット神父（イエスの聖心会司祭）

プロジェクト後に寄せられた
イブラヒム神父の感謝のことは

このプロジェクトに
かかわってくださった
すべての皆様、



2003年10月、私は日本を訪問する機会があり、寛大さと几帳面さと協調性で知られている日本の人々と出会いました。訪問の際、希望と信仰とに満ちているたくさんのキリスト者とお会いしました。

私は特に、ヒロシマとナガサキの悲劇のあとで国を再建するために行われた苦闘に心を動かされました。そして、私はすぐに気づきました、「意志があるとき、道がある。信じるとき、達成できる。夢見るとき、希望を見いだせる。」と。私はパレスチナとイスラエルの若者たちを日本に連れて行き日本でともに過ごすという夢を、このときから持つようになりました。というのも、私はイタリアで成功を収めたこのようなプロジェクトを経験しており、イタリアの人々はこの考えを快く受け入れ、私の夢の達成を励ましてくれていたからです。

2005年8月、私の夢は実現しました。パレスチナの若者は日本でイスラエルの若者とやっと会うことができました。パレスチナの若者もイスラエルの若者も互いに出会うのはこれがはじめてだったのです。当初は、双方にとってお互いを受け入れることは大変なことでしたが、日本の若者の助けによって、だんだんお互いを受け入れ合ってゆき、最後には彼ら自身がテレビで語りました。「**私たちは、ついに友だちになりました**」と。

日本でこのようなプロジェクトを実施し、成功裡に終了したことは、私たち全員にとって素晴らしい価値のある体験でした。このまたとない出会いの結果は、未来への確かな希望を、聖地に平和の文化を築き上げるという希望をきっともたらすでしょう。ですからパレスチナ人もイスラエル人も、家族、友人、共同体の中で平和の文化を広めるために働くべきなのです。私は本当に日本の方々のもてなしと助けとをありがたく思っておりますし、希望を私たちに与えてくださったことを感謝します。

さらにパレスチナ人とイスラエル人が互いに受け入れ合い、信頼しあう国を築くことを目指し、今後もこのプロジェクトを継続して実施していくことをお約束します。日本の方々が、聖地で平和を築いていく私たちのパートナーとなってくださったことを重ねてお礼申し上げます。

日本の皆様、どうぞ聖地においでください。いつでも歓迎いたします。そして今後ともパレスチナ人とイスラエル人を結ぶ平和の架け橋となっていただきたいと思います。

心からの尊敬のうちに。

イブラヒム・ファルタス神父（フランシスコ会）

イスラエル・パレスチナ平和使節団団長・エルサレム カトリック教会主任司祭

イスラエル・パレスチナ・日本「平和をつくる子ども交流プロジェクト」
高校生とともに行く 平和のための聖地視察旅行

参加者募集！ (大人と高校生)

- ★ 旅行期間：2006 年 3 月 22 日 (水)～4 月 3 日 (月)
- ★ 旅行費用：約 300,000 円 (これはお一人様の旅費の実費です。)
他に現地での研修・ミーティング費用、その他のグループとしての経費などは、
NPO 法人「聖地のこどもを支える会」が負担いたします。
- ★ 利用予定航空会社：アリタリア航空 or エールフランス航空
- ★ 申込締切り：2006 年 1 月 31 日
- ★ 宿泊：《エルサレム 5 泊、死海 1 泊、ガリラヤ湖畔 2 泊、テルアビブ 2 泊》
(高校生ために、エルサレム 2 泊、テルアビブ 2 泊のホームステイを予定しています)

プログラム：

- 1) この夏イブラヒム神父とともに来日した
イスラエル・パレスチナの高校生との再会、
親睦と交流、「平和の対話」
- 2) 現地の大人、子どもとの出会いとふれあい
- 3) 学校、乳児院、「分離の壁」など、
紛争の実情視察、家庭訪問
- 4) エルサレム三大宗教の聖地訪問
ベツレヘム聖誕教会訪問
- 5) 死海、ガリラヤ湖、ゴラン高原など

前ページのイブラヒム神父の招きに応じて、「平和の架け橋」となるべく、友だちになった高校生同士の再会を果たして対話を続け、現地の実情視察とおして研修をすることになりました。プロジェクトを支えてくださった皆様のご参加を大歓迎いたします。また「平和」に関心のある高校生で、参加希望の方があれば、ご紹介下さい。

お問合せとお申込み：

NPO 法人 聖地のこどもを支える会
Tel & Fax : 03-3379-5571

ベツレヘムの
子どもたちからの手紙
支援者のみなさま
あいがとう！
シュークラン！



支援者の皆様、こんにちは！

私は幸運な生徒だと思えます。私のような者の面倒をみてくださる方がいらっしゃると思えるからです。みなさまのご支援のおかげで、私や私の学校の大勢の子供が勉強を続けています。さもなければみんな学校をやめているところでした。国情は悪く、経済状況もひどいのです。失業している人も大勢います。5～6人の子供をかかえている家族のことを考えてみてください……お分かりでしょう？

みなさまの温かいお心を尊いと思っています。今までの、そしてこれからのご活動にも感謝申し上げます。

心をこめて。

アミラ シード (女) バイト・サフル/ルーテル学校

ご支援くださるみなさま、

寛大なご支援をありがとうございます。おかげさまで、ぼくの学費が補われ、卒業できます。父は5年間仕事がない上に、肩に大きな責任を負っています。例えばぼくの2人の兄の大学の学費です。みなさまは困難な状況に置かれたぼくたちに温かな手をさしのべてくださっています。

もう一度、ぼくの勉強を支えてくださっていることを感謝します。神さまがみなさまをお守りくださいますように。

心から感謝をこめて。

イハブ ファリド ザィード (男) ベイト・サフル/ルーテル学校



みなさま、

パレスチナ、とくに私の住む町ベツレヘムの状況をお話したいと思います。パレスチナについてはお話しすることがたくさんあります。どうぞ、こちらの家族の話をお聞きください。

私はパレスチナ人の女の子で、家族は兄弟2人と姉1人です。第2次インティファダが始まる前は並みの暮らしぶりでした。インティファダとともにいろいろ問題がおきて、一般のパレスチナ人の生活が圧迫されて、とても悪くなりました。私たちはすっかり包囲されています。どこへも出られず、仕事のチャンスも限られています。エルサレムでもベツレヘムでも大勢が失業していて、パレスチナ全体の失業率は増し、生活レベルは下がっています。それで、子供を働かせたり、低学年のうちから学校にも行かせられない家もあります。こうしたことは、私たちの悲惨な生活のほんの一コマです。私たちの生活は占領政策によって、社会的にも経済的にもすっかり破壊され、心理的にもみんな大きなダメージを受けています。

私たちの嘆きを聞いてくださってありがとうございます。エルサレムにある海外の団体を通していただいているご支援のおかげで、困難も乗り越えられます。私も恩恵をいただく一人です。

心から。

ディマ A. ベイト・サフル/良き羊飼スウェーデン学校



みなさま、

地上のもっとも清らかな場所、イエス様がお生まれになって生きておられた聖なる所、ベツレヘム。イスラエルの占領がその地を荒らし、人々の財産を奪って以来、ここにはまだ光が射していません。

人々は最悪の状態を耐えしのんでいます。包囲による貧困に苦しみ、ベツレヘムは大きな監獄となっています。生活の最低限の必要すら満たせない家庭もあります。

子供たちを学校や病院に通わせるお金ありません。親が学費を払えないため、子供たちは学校をやめています。町で子供がガムやキャンデーを売り歩く姿も見られます。いつ虐待やレイプに遭うかもしれない危険な状況です。



私たちベツレヘムの子供たちは、子供らしい生き方ができません。子供の権利もずい分奪われています。夜、楽しい夢を見ている最中、銃撃や爆撃の音で目を覚ますのはどんな感じかご想像ください。父親や友だちが目の前で無慈悲に獣のように死んでいく子供の思いをご想像ください。占領は私たちから笑顔を、夢を、希望を奪いました。心はずむ未来などありません。

海外からのご援助をまとめて、授業料を助けてくださっている連帯事務局に感謝します。私はそのご援助を受けている幸いな女生徒の一人です。

心から。 アマンダ A (女) バイト・サフル／良き羊飼スウェーデン学校

★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

2005年10月18日英国ガーディアン紙から
クリス・マッグリールの記事抜粋

エルサレムの北端、パレスチナのラマラに向かう主要道路上にあるカラディヤ検問所が、最近の拡張工事で、まるで本格的な国境のようになった。(中略)

数週間後に工事が完了すると、高さ8メートルの「分離の壁」の、まだ残っている隙間は閉ざされる。イスラエルとラマラの間の通行を許される者でも、身元確認と保安チェックをくぐり抜けなければならなくなる。

イスラエルのシャロン首相による、ガザ地区からのユダヤ人入植者撤退が世界の注目を浴びているすきに、イスラエル軍はこの数カ月間密かに、これらの検問所とエルサレムを取り囲む「分離の壁」の建設を急ピッチで進めてきた。(中略)

西岸地区の670キロにわたる壁は、イスラエルの戦略の中核であり、イスラエルの政治家の多くが将来の国境とみなしている。壁のルートは、アリエルやマアレ・アドゥミム、グッシュ・エツィオンの入植地の拡張のために、西岸地区の大きな範囲を切り取り、膨大なパレスチナ人の土地を所有者から切り離し、奪っている。(中略)

イスラエルはまたさらに領土の拡大を続け、確保を狙っている。7月だけでもガザで放棄した以上の土地を西岸地区で接収している。ガザの約19平方マイルの土地から撤退したが、西岸地区のマアレ・アドゥミム周辺で23平方マイルの土地を囲い込んでいるのだ。

シャロン首相は9月にリクード党の会議で、世界の注目を集めずに入植地を拡大することが重要であると述べた。「口に出す必要は無い。建設するのみだ。われわ



れは何も口に出さずに建設を進めている」と述べた。その数日後首相の上級補佐官エヤル・アラドは「一方的に、恒久的なイスラエルの国境を決定する戦略」を公然と提唱した。

国連人道問題調整事務所のデイビッド・シアラーは次のように述べた。「今、われわれが目目の当たりにしているのは壁の建設の加速だ。壁のせいで、エルサレムは西岸の他の地域から封鎖されようとしている。エルサレム市内の移動も、磁気カードと複雑なゲートを用いたシステムで管理されることになる。パレスチナ人が享受してきた、礼拝場や優れた学校や病院に行く権利が激しく制限されようとしている。」

エルサレムを貫くコンクリートの壁は、エルサレムのアラブ人の居住区を切り取り、非ユダヤ人居住地区の拡大を制限し、およそ 200,000 人のパレスチナ住民を、パレスチナの被占領地域から切り離す。

壁で境界を設けて、エルサレムをマアレ・アドゥミム入植地とつなごうとする動きがあり、そうなれば東エルサレムは、他の西岸地域からさらに隔絶されることになる。その結果、エルサレムのアラブ人区域は、巨大なユダヤ人居住区に取り囲まれてしまい、イスラエルの境界は西岸地区の真ん中くらいまで押し広げられることになり、パレスチナの領土をその一番狭い部分でほとんど南北に分断することになる。

インターナショナル・クライシス・グループをはじめとする諸団体は、このような動きは一触即発の結果をもたらす可能性がある」と指摘している。インターナショナル・クライシス・グループは最近のレポートで、「エルサレムとその周辺地域に関する現在の政策は、存続可能なパレスチナの首都を東エルサレムのアラブ人居住区に設立することを阻み、パレスチナ国家の領土を分断することで、紛争を解決するための今後の取り組みを非常に困難にし、場合によっては不可能にする」と述べている。

また、「現在実施されている政策は、いかなる実現可能な二国家構想にも反するものであり、イスラエルの安全を高めるものではない。それどころか、パレスチナの現実主義者を弱体化し、何十万人ものパレスチナ人をフェンスのイスラエル側に囲い込み、先鋭化の種を蒔くことによって、イスラエルの安全を危うくする」としている。(中略)

しかし、前イスラエル政府閣僚で和平交渉担当者であったヨッシ・ベイリンは、和平プランのロードマップを監視するための、アメリカ、国連、EU、ロシアからの圧力の欠如が、シャロン首相に勝手にイスラエルの国境を引きなおすことを許していると述べている。

「私はとても悲観的だ。和平交渉で言っていることと現実の間に大きなギャップがある。ロードマップがいかに討議事項の上位に掲げられていても、いかに外国の政府がロードマップに取り組まなければならないと言っても、実際には何も起こっていない。何もだ。シャロンは思うがままに行動している。」



フォトアルバム

プロジェクトの写真と「分離の壁」、
およびパレスチナ子どもたちの
写真（関谷義樹神父様撮影）を
お届けします。



左：新幹線の中で友情を深める日本人・
イスラエル人・パレスチナ人高校生



上：広島 One ピース運動で、
日本人の女の子と笑顔で話すイブラヒム神父



左：オリーブの枝を持つ二人の女の子



上：エルサレムと占領区の間にはそびえる高さ9mの
「分離の壁」 壁の建設は急ピッチで進む。



右：エルサレム・
テラ・サンクタ学院の
元気な子どもたち



左：殉教者（自爆攻撃者）の
写真を掲げ、旗を降るデヘイシャ
難民キャンプの子どもたち